

- 立科小学校／午前9時～午前11時30分
電話 56-3131 (呼)・有線2190 (呼)
- 立科中学校／午後2時～午後5時
電話 56-1076 (呼)・有線2251 (呼)
- 立科町児童館／
午前 11時40分～午後 1時30分
電話 56-0303 (直通)
有線 8889 (直通)

※予約をされる方は児童館または小・中学校の
教頭先生へご連絡をお願いします。

子どもたちの未来のために

～村上春樹の 「カタルーニャ国際賞スピーチ」に学ぶ～

立科町教育相談員 岩上起美男

作家、村上春樹の作品は、50か国もの国で翻訳され、出版されているそうです。世界の多くの人が村上作品を愛読しており、ここ数年は、ノーベル賞発表の時期になりますと、今年こそ受賞か……、とメディアが騒ぐのが常です。昨年はフランスの作家が受賞しましたが、近い将来(今秋?)、必ずやノーベル文学賞を受賞することでしょう。

40年ほど前、村上春樹が「風の歌を聴け」という小説で文壇に登場したときには、同じ年齢ということもあり、このデビュー作品をしっかりと読みました。その後、「ノルウェーの森」や「海辺のカフカ」も読みましたが、同時代の「限りなく透明に近いブルー」(村上龍著)などに比べ、茫洋とした印象だけが残りました。——むろん、その原因は老生の読解力や資質の低劣さにあると十分自覚しています。

そして今も、かつて確かに読んだはずの村上作品の内容を思い起こそうとしても、夢が時に記憶のない深い海底に沈み込み、何としても思い出せないように、ストーリーも登場人物も見事に消えているのです。これは、間違いなく教育相談員自身の老化による大きな原因だと思います。ただ、「限りなく透明に近いブルー」などは、記憶が記憶の彼方に消

えていく速度や曲がりくねった、狭く暗い廃坑のような経路、幽かに残る余韻が、どこか何か違う……?

この疑問に答えてくれたのが、日本の臨床心理学の先駆者、河合隼雄です。

村上春樹は、(空中浮遊の夢以外)夢をほとんど見ないそうです……、このコメントに対して河合隼雄が、「それは小説を書いているからだ。物語を書いているときは、現実生活と物語を書くことが完全にパラレル(二つの事柄が並んで存在すること)になっている。だから、夢を見る必要がない。」と述べたのです。

(「村上春樹、河合隼雄に会いにいく」)

村上作品の印象は、老生がほとんど毎夜見る夢とどこか似ており、村上春樹が書き綴った物語という意識の底にある前意識と、その前意識のさらに奥底にある無意識の混沌とした世界、すなわち夢に見る世界を基調としているので、作品の内容が夢のようにするすると消えていくのだ、と勝手に納得したのです。

といった次第で、村上春樹の作品と何となく疎遠になつていました。

数年前のそんなある日、たまたま村上春樹の「カタルーニャ国際賞スピーチ」に出会い、大きな衝撃を受けました。かつて、すぐ消えてしまう夢のような茫洋とした何かが残らなかつた村上春樹の

言葉の一語一語に、心からの共感を覚えたのです。

村上春樹は、受賞の喜びと感謝を述べた上で、「原子力」の現実について、その何倍も熱く語りました。紙面に限りがありますので、このスピーチの要約(スピーチ全文はネット上でご覧になれます。)を掲載致します。子どもたちの健やかな成長のために、ぜひお読みいただき、子どもたちの未来を壊したり、奪ったりしないようにしましょう……。

* * *

ご存じのように、(3か月前の)3月11日午後2時46分に日本の東北地方を巨大な地震が襲いました。

地震そのものの被害も甚大でしたが、その後の津波はすさまじい爪痕を残しました。場所によっては、津波は39層の高さにまで達しました。海岸近くにいた人々は逃げ切れず、二万五千人近くの人々が犠牲になり、そのうちの九千人近くが行方不明のままです。

生き残った人々も、その多くが家族や友人を失い、家や財産を失い、生活の基盤を失いました。生きる希望そのものをむしり取られた人々も数多くおられたはずです。

今回の大地震で、ほぼすべての日本人は激しいショックを受けましたし、普段か